

GIII vol. 127 「田中栄一展 太古の鼓動」 関連イベント

アーティストトーク

日時 2019年2月17日(日) 13:30-14:00

場所 熊本市現代美術館 ギャラリーIII

講師 田中栄一(写真家)

司会進行 富澤治子(熊本市現代美術館学芸事業班主査・学芸員)



GIII vol. 127 田中栄一展 太古の鼓動

会期 2019年 2月14日(木)-4月21日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーIII

富澤 これより「GIII vol.127田中栄一展 太古の鼓動」のアーティストトークを行います。出品作家の田中栄一さんをご紹介します、どうぞ宜しくお願い致します。

田中 皆さん、こんにちは。田中栄一です。この日を生きて迎えることができ本当に嬉しいです。

富澤 今回のアーティストトークは、質問形式で進めていきたいと思っております。初めに、本展の出品作品についてですが、フレーザー島で撮影した作品が中心ですので、まずフレーザー島との出逢いについてお聞きしたいと思います。

田中 かつて、よく仕事で、大分の国東半島の撮影に行っていました。ある日、仕事が早く終わったものだから、いつもの民宿に戻ってゆっくりしていたら、あるドキュメンタリーがテレビで流れ始めたのです。NHKの教育テレビで、フレーザー島に関するドキュメンタリー番組「砂と時」でした。それを見ていたら、直感的に「私の世界が、この場所に行けば必ず見つかるな」という予感がしまして、この島に行こうと決めたのです。ですが、父が病気をして通院したり、闘病生活になったり、会社もすぐには辞めることが出来なかったので、一年後ぐらいにオーストラリアのフレーザー島に行くことになりました。

フレーザー島は結構大きな島で、縦の長さが大体熊本から福岡ぐらいの距離があります。125kmぐらいですかね。歩いて撮影するのは、とても不可能なので、ジープをなんとか頑張って用立てまして、ジープで島を回るなかで、ある作品が一点生まれました。一点生まれたことで、「これは、また別の作品も作れるな」という自信が出てきて、その後は自宅のバンガローとテントを交互に使いながら、約半年ぐらい撮影をし続けました。



取材に使ったジープ

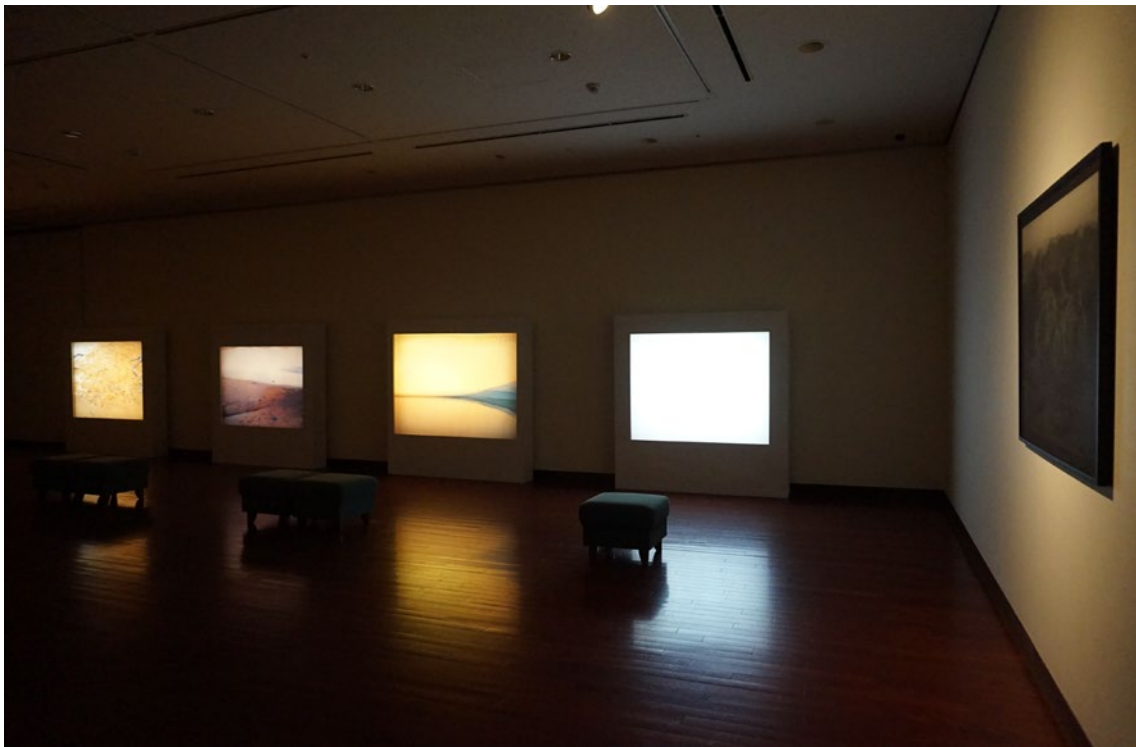


フレーザー島取材中に友人と(右が本人)

一日の始まりは鳥のさえずりから始まります。しまいには、もの凄いたくさんの鳥たちの鳴き声で目覚めるというような生活です。朝は弁当作りです。朝食を作る時に、その日の弁当も作りまして、その弁当を持って、だいたい30kgあるカメラと三脚を担ぎながら、砂漠を歩きながら被写体を見付けます。エイトバイテン(8×10)カメラという大きなカメラを使用して撮影したのが、今ここに飾ってある作品です。

富澤 フレーザー島を取材した作品は、モノクロの作品とカラーの作品があります。今回のメインはカラーの作品なのですが、撮影する時の違いなど、モノクロとカラーを選ぶ時の気持ちについて、お話し頂けますか。

田中 基本的にはモノクロが好きなのですから、モノクロがメインです。でも、色に感動した時などがありますし、色でしか撮れない被写体も出てきますので、そういう時にはカラーを使って撮影しています。カラーの場合はリバーサルフィルムといって、現実と同じような色合いが、しっかり出るようなフィルムを使用しています。



富澤 続いて今回のメイン、大型のライトボックス型作品についてお話を聞こうと思います。これらの制作についてお話しください。

田中 この大型ライトボックス型作品は、中にたくさんのLEDライトがありまして、内側から直接発光しているのを皆さんは鑑賞します。それは、すごく現実に近い体験だと思います。このビルの中で、まるでその場所にいるように大自然が見れるということは、非常に贅沢なことです。町の真

途中で、大自然の造形物を見れるということ、自分自身も面白いなと思います。椅子をここに用意したのは、この椅子に座って見るのが、見方としては一番、作品が深く観賞できると思いますので、立って見ながら歩くのもいいのですが、じっくり座って、ゆっくり一枚一枚見て頂きたいと思っています。

富澤 大型ライトボックス型作品のお話をもう少しお聞かせください。このような形にしようと思いついたのは、どういうきっかけだったのでしょうか。そしていつ頃から構想していたのでしょうか。

田中 こういうライトボックスは、皆さんもデパートなどに行くと、例えば化粧品の宣伝でよく使っていますし、とても綺麗に見えるのです。ですから、自分もそういうものを使って、大自然の造形を見せたら、より効果的になるのじゃないだろうかと思ひまして試みしました。しかし現実には、もの凄く大変なことがわかりました。つくるのも大変だし、ものすごい費用がかかったのですが、それだけ価値は高いかなと思います。こういう作品をしっかりと見せることが、皆さんの何かのヒントになればいいなと思っております。

富澤 このサイズ感は、どういう風に決めたのですか。すごい大型ですね。

田中 8×10インチフィルムですから、これだけ大きく伸ばしても、細かいところのディテールまでしっかり写っていて、こういう小さな模様もはっきり見ることが可能です。現実の風景とあまり変わらないように、大自然を体感できるようにと、このサイズにしています。

富澤 先ほど、制作の苦労話がありましたが、これら全部は特注で作られていて、一点一点微妙にサイズも違います。つまり、田中さんが作品の表現として身体的に一番フィットしたサイズで作られているということです。

さて、続きましてモノクロの作品についても、お話を伺いたいと思います。先程から、田中さんよりエイトバイテン(8×10)というカメラのお話が出てるのですが、本日のトークの為に、田中さんがその大型カメラを持っているご自身のスナップ写真を持って来て下さっているの、会場内の皆さんに回覧しますね。会場には当館所蔵の《記憶の果て シナイ山》を出品しています。田中さん、シナイ山との出逢いについて、お話をお聞かせください。

田中 エジプトのカイロの、ちょっとしたホテルのバーに行った時に、日本人の男性がいたので話を始めたわけです。そしたら「カイロに来てるのだったら、シナイ山というところはすごいですよ」という話になりまして、面白いなと僕も思ひまして、カイロからシナイ山までバスで行ったのです。

そしてエイトバイテン(8×10)のカメラ、この大きい機械を持ちまして、この石山、シナイ山に登山したわけです。見ての通りこの風景はすべて石の世界です。皆さんも行くと感じられるかもしれないのですが、ものすごい莫大なエネルギーを感じました。「石にはエネルギーが蓄えられやすいのじゃないかな?」と、僕は体感しました。この風景を撮影して、現像してプリントして見ると、UFOが

飛んできてもおかしくないような風景だなと思いました。ここは、モーゼが十戒を授かった場所と言われてます。僕はこの石山の一角でキャンプしながら、色んな所を、ラクダを使って周ったり、散策したりして撮影をしました。

そんな風に、最初エネルギーを凄く感じたので、その正体を知りたくて再びシナイ山に行ったのです。でも、二度目はもうその場にエネルギーは感じなかった。その時思ったのは、エネルギーの正体を見付けようと思った意識のせいで、エネルギーが感じられなかったのかもしれないし、もしくは、そのとき石から発するエネルギーが出てなかったのかもとも思いました。とにかく不思議な空間の場所です。

富澤 こちらの作品をモノクロで撮ったのは、やはり造形への意識ですか。

田中 そうですね。カラーで撮っても、やっぱり同じように白黒的な写真にはなるとは思います。敢えて色が付かない方が強調されるものがあります。「白黒」というのは、水墨画と一緒に、余分なものを排除するから、落ち着くのです。ゆっくり眺めることができる。でもこの風景ですから、現実には負けます。是非、機会があったら行って見て下さい。

富澤 いくつか私から質問したいのですが、今回「太古の鼓動」が展覧会のタイトルになりました。この「太古の鼓動」についての田中さんの想いをお聞かせください。それと、《砂と記憶》シリーズへの想いもお聞きしたいと思います。



《砂と記憶②フレイザー・アイランド》1991年 熊本市現代美術館蔵

田中 フレーザー島の写真の作品名はすべて《砂と記憶》にしていますが、この「砂と記憶」という作品名については、思うに、物質というものに記憶が宿るのではないか、物質というものが誕生して、その記憶が宿る。物質そのものが記憶装置みたいなものなのではないかと思っております。そして、風景も物質から生まれます。風景もまた、記憶を蘇らせてくれる一つの記憶装置だと考えています。写真もその一つで、こういう風景、それは物質なのですが、それらを撮って記録する、そこから、なにか色々な記憶が蘇る。自分にとって写真の存在は、そこにあるのかなと思いついて、一番迫力のある大型カメラで撮影をしています。大型フィルムですから、凄く小さいところまで観察できますし、色んな楽しみ方をすることができます。

「太古の鼓動」という展覧会タイトルについては、...ちょっと頭が回らなくなってきています。大変です。脳出血のせいにしますが、それは恐ろしい現象で、脳出血すると、出血後に血が引くときに脳も溶けて出てしまうそうなのです。医者から言われた時は啞然としました。物忘れも酷いし、言語障害もあり、体も動きがちょっと鈍ってきて、生きてるだけで大変な状態です。それでも、こうやって写真展をやれたのは、本当に皆さんの協力で、僕は今ここに立っております。ちょっと前まで作品もなかなか作れずに、この日を迎えられるかどうか疑問に思ってたぐらいだったのですが、色んな人達との縁で、こうやって何とかこの日を迎えることができました。

この展覧会チラシのために「太古の鼓動／一秒も一億年も同じ時の世界／想像は心のエネルギー源だ」という短い文章を書きました。「太古の鼓動」とは、僕達が降り立ったこの世というのは、物質の世界であり、その物質が生まれたと同時に、時間の世界に降り立ったのだと僕は感じております。物質が生まれて、時が流れ始め、記憶が発生したとと思っているので、こういう展覧会名にしました。そして、「一秒も一億年も同じ時の世界」とは、僕達は今ここに、こうやって現在の世界を見ているけど、長い時も、一瞬一瞬こうやって生きている時も、本当はさほど変わりはないのだという風を感じています。また、「想像は心のエネルギー源だ」については、こうやって作品を作ったり想像する事は、心にとって非常に活発なエネルギーを持つことができ、元気をもたらすと感じているので、こういう文章になりました。

最後に、僕の作った詩1編を朗読したいと思います。

物質は時であり、記憶装置である。

物質が現われ、時は流れ始めた。

知的生命体も生まれ、物質、風景に記憶という概念が発生した。

そして人間は言葉を使いこなし、単語を重複することで思考を深めていった。

Matter is time, matter is a memory device.

Matter appeared and time began to flow.

An intelligent life was born, and the concept of memory emerged in material and landscape.

Then human beings mastered words and deepened their thoughts by duplicating these words.

Furthermore, when they replaced words with letters, they started to make objective analysis.

富澤 ありがとうございます。あと少し時間がありますので、来場者の方から質問を受け付けたいと思います。

来場者1 こちらの2枚の写真について伺いたいのですが、こちらの二枚は非常に抽象的な感じの印象を受けるのですが、これを撮られた時の様子、田中先生はどう感じられたのかをお聞きしたいです。それと、条件が合えばこういうふうな写真が撮れるものなののでしょうか、それとも何か特別な撮り方をされているのでしょうか。あるいは撮影の後、画像的な処理をされているのでしょうか。

田中 画像的な処理といったら、ライトボックスで表現するというのが、ひとつの特殊な表現方法だと思いますが、その他はすべて目で見た自然造形のままです。自然造形をそのまま忠実に写し込んでいます。この写真の、砂の空間ですが、上と下では模様の種類が違います。よく見ると、上は波打ってるような感じです。中間に丘みたいな斜面があって、下はまた別の自然の模様が浮かんでます。1つの面に、2つの模様が作り出されるというところが、非常に面白いなと思って撮影しました。

そして、左の写真ですが、この場所全体が白状の砂漠の風景なのですが、そこに雨が降って、雨水が中心部分にどんどん溜まってって池ができて、そこが夕方に赤い光で照らされると水面も赤く反射しているのです。時間が経つとこの水も乾燥してなくなります。梅雨の時期だったのでしょうか。水が残ってることによって面白い風景写真になっていると思います。

来場者1 ありがとうございました。

来場者2 エイトバイテン(8×10)で撮られてるとのことですが、これは何枚も集中して撮られてるのですか。特徴を変えているとか、絞りに対する拘りとかありますか。

田中 だいたい絞りは50とか60とかですね。もの凄い絞り込んで、ピントがどこでも合うようにしています。なるべくボケずに見えるように撮ります。撮れない時もあります(笑)。エイトバイテン(8×10)というのは非常に不便なカメラで、そんなパチパチ撮るようなカメラではありません。だいたい一枚撮る時は1カットを基準として撮っております。でも、余裕がある場合は、何カットか撮ることもあります。何回か同じ場所に通うこともあります。なぜかという、太陽の位置関係で風景は変わっていくからです。それと風です、風によってカメラが動いて撮れない時もあります。それとかたちです、風紋というのは風によって作られますので、風の具合で模様が変わってきますから、同じ風景は二度と撮れません。だから、「次、撮ろう」ということは考えずに、その時、一発勝負で1カットを大切に、バシッと捉えるような方法で、ずっと撮っていました。

富澤 あっという間の30分でした。たくさんの興味深いお話を、本当にありがとうございました。